

優秀賞

開聞岳は何を想つか

長野県 東御市立東部中学校一年 鮫島 早穂

今年の二月初めに、私は祖父を亡くした。祖父の葬儀をするため、私は家族五人と飛行機で長野県から遠く離れた鹿児島県知覧町へ行った。祖父の家は知覧の大きく広がる茶畑の中にある。そして茶畑の広がる先には一つ飛び抜けている大きな山が見える。父に聞いてみると「開聞岳」というそうだ。祖父の家から見えるこの景色を、私は素直に美しいと思った。葬儀が終わり落ち着いてきた頃、私は父に連れられて知覧特攻平和会館に行くことになった。

知覧特攻平和会館。名前を聞いたことがあるくらいで詳しくは知らなかった。館内に入るとそこには、写真が無数に並んでいた。全員、特攻により亡くなった方たちだ。中には私と同じ十代の人もいて、当時の日本の悲惨な状況に心が苦しくなった。写真の下には、両親や弟妹など、自分の家族への手紙が展示されていた。その手紙には今までの感謝と謝罪、最後には幸せに長生きしてほしいという願いが書か

れていた。手紙を読んでいく内に、私は特攻隊の方たちは片道だけの燃量を積んで特攻し、絶対に生きて帰ることができなかったという事実には衝撃を受けた。そして、館内を一周したところでさらに衝撃を受けた。私の住む長野県からも知覧から特攻し、亡くなった方がいたのだ。私にも十八歳の兄がいる。八十年前だったらと思うと、急にこの戦争が怖くなっていた。それと共に、こんなに悲しい歴史をくり返してはいけなさと強く思った。

知覧特攻平和会館から祖父の家への帰り道、茶畑の中に真っ直ぐ伸びている一本の道があった。そこは祖父が生前、

「この道は元々特攻隊の戦闘機の滑走路だったんだよ。」

と言っていた場所だった。

「ここからは開聞岳がよく見える。特攻隊の人たちはこの知覧から最後に開聞岳を見て飛び立って

ったんだよ。」

このことを思い出して私は言葉を失った。死ぬと分かっている中で、最後に開聞岳に別れを告げた時の気持ちはどうなものだったのだろうか。

知覧から飛び立っていった特攻隊の方たちの微笑んでいる写真。その写真に写る目は一体何を見ているのだろうか。自分の大切な人たちの、日本の希望ある未来を見ているのだろうか。特攻した方たち、戦争で犠牲になった方たち、沢山の方たちのおかげで、今の日本は平和な暮らしができています。

戦争から八十年たった今も、知覧の茶畑、その先に見える海と開聞岳の景色は変わることなく、私の目の前にある。特攻隊の方々を見守った開聞岳は、今も私達を見守っている。この穏やかな景色の中、平和な暮らしが続いていくように、私は、日本のために犠牲になって守ってくれた方々がいたことを忘れずに生きていきたい。そして、平和への感謝の気持ちを持ち続けていきたいと思う。

